

演題番号：C12

ミルナシプランを使用した犬の睡眠呼吸障害(SDB)の1例

○井上翔太, 中森正也, 加藤智彩, 木原 翠, 船崎正治, 吉中潤華

乙訓どうぶつ病院

1. はじめに：睡眠呼吸障害(SDB)とは、人医療において睡眠時の無呼吸や低呼吸あるいは酸素飽和度の低下を伴う呼吸異常と定義されている。SDBの原因は上気道の解剖学的・後天的な器質的障害が考えられ、獣医療においても治療は外科または内科的に閉塞を緩和させる方法が検討されている。その一つとしてセロトニン・ノルアドレナリン再取り込み阻害剤であるミルナシプランが、脳幹内のセロトニンを増加させ、咽頭拡張筋を活性化させ咽頭閉塞を改善させると期待されている。今回、SDBを呈した症例に遭遇したため、ミルナシプランの使用法を検討した。

2. 材料と方法：キャバリア・キング・チャールズ・スパニエル、未去勢雄、9歳。いびき(幼少期から)、睡眠時無呼吸、日中傾眠を主訴に来院した。身体検査では重度の肥満(BCS 9/9)、興奮時のスターターが認められた。頭部X線検査にて咽頭虚脱と軟口蓋過長症に伴うSDBと仮診断し、減量とミルナシプランの内服を開始した。

3. 結果：第2病日からSDBは顕著に改善され日中の活動量も増加した。また、約20%減量に成功し、症状も認められなかったため第76病日にミルナシプランを休薬した。第90

病日にいびきのみ再発を認めたため投薬を再開したが、改善しなかった。第110病日にCTと喉頭内視鏡検査で軟口蓋過長症が認められたため、第131病日に軟口蓋切除術を実施した。現在、第250病日に至るまでSDBの再発は認められていない。

4. 考察および結語：SDBは人医療において心不全や糖尿病など様々な合併症の報告があり、積極的な治療介入が望まれる。特に肥満に伴う重度のSDBでは減量が重要な治療となるが、ただちに減量することは不可能である。今回、ミルナシプラン投与直後よりSDBが改善し、その後いびきの再発は認められたものの、減量により咽頭閉塞が軽減され無呼吸や日中の傾眠が改善した。QOLを改善させるとともに日中の活動量を増やし減量の一助とするために、減量開始から終了までのミルナシプランの投薬は有用だと考えた。ただし、薬の効果は1~3ヶ月と報告されており、本症例でも第90病日以降はいびきの再発が認められたため、短期間のみ効果的だと考えた上で、計画的な減量計画も重要である。